

潮来市の誇れる自然 第88回

公開シンポジウム「霞ヶ浦流域研究2025」が大盛況

寒暖の差が大きな冬が終わり、ようやく春らしくなってきました。学生たちの野外調査が本格化する前の3月2日に、茨城大学水圏環境フィールドステーション主催の公開シンポジウム「霞ヶ浦流域研究2025」が、レイクエコー（鹿行生涯学習センター）で開催されました。霞ヶ浦流域などで調査・研究を行う高校生・大学生、県の自然博物館や水産試験場、霞ヶ浦環境科学センターの研究者、市民などが集まって、最新の成果を報告し合いました（写真1、2）。今年は口頭発表7題、ポスター発表25題で、81名が参加しました。

例年通り発表内容は多岐にわたりました。例えば、霞ヶ浦・北浦の水質や流れの解析、新たな水質改善技術、近年のアオコの発生状況、ドローン撮影による湖岸植生帯調査手法の検討、ユスリカ類幼虫の長期的な個体数変動に及ぼす環境要因、外来植物ナガ



(写真1) 大学生が口頭発表中



(写真2) ポスター発表也大盛況！

エツルノゲイトウ帯での魚類・エビ類の生息状況、ワカサギやシラウオ、ゴロ（ハゼ類）など水産上重要種の生態や資源変動要因、淡水域での海水魚スズキの生息、外来ナマズを材料とする製品開発プランなど。また、周辺地域での事例として、波崎海岸でのマイクロプラスチックの特徴や分析方法、菅生沼の魚類相、関東地方での外来魚ヨコシマドンコの分布拡大、福島県の帰還困難区域での放射性物質の挙動などの報告もあり、情報交換の時間は大いに盛り上がりました。

今後とも、霞ヶ浦流域の生徒・学生・研究者・市民のみならず、調査・研究を続けていきたいと思えます。引き続き、ご理解とご協力のほどをお願いいたします。

茨城大学地球・地域環境共創機構
水圏環境フィールドステーション
金子誠也・加納光樹

潮来市の誇れる文化 第149回

芭蕉句碑残る水神社

大洲水神社の鳥居をくぐり直ぐの境内右横に、松尾芭蕉の句碑が建てられています。

この句碑は明治九年（一八七六年）に建設記念碑として建てられたものですから、今から一五〇年ほど前の碑です。現在境内には水神宮様と大六天神様が鎮座されていますが、明治五年壬申六月に大六天神が再建され、明治八年には水神宮修復が行われました。この二つを記念して建てられたことが句碑の裏面に記されています。

建主は大洲生まれの映雪堂花彦で、俳諧の宗匠でもありました。詠吟も多く、地元の大洲社中、延万社中などの俳諧結社を率いて多くの門弟を指導し大いに活躍しました。

江戸後期から明治期にかけて、水郷地方では庶民文化として俳諧が流行しました。

芭蕉の句「刈（かり）かけし田面（たづら）の鶴（つる）やさとの秋（あき）」はせを芭蕉は、「鹿島紀行」（貞享四年一六八七年）の「田家」の中にある句から選ばれたものでした。「稲を刈りかけた田んぼで、鶴がえさをついばんでいる。のどかな里の秋だなあ。」と解釈されます。貞享四年八月十四日、松尾芭蕉は名月を見るため、門人の曾良（そら）・宗波（そうは）を伴い鹿島・潮来方面へ出かける旅をしました。

江戸深川の芭蕉庵から舟で行徳へ。それから陸路で布佐へ。そこから夜舟で鹿島根本寺に至ります。翌日、鹿島神宮に参詣し、芭蕉の禅の師といわれる仏頂和尚を訪ねて一泊し、雨間の月見をします。

芭蕉は帰路に潮来の本間自準宅を訪ねます。この句は潮来に向かう途中、前川から見た光景を詠んだのではないかと考えられています。一枚の石碑から、当時の人々の暮らしか文化をひもとくこともあります。



（参考）中根誠『常陸俳諧散步』（二〇一八、暁印書館、『潮来町史』

潮来市文化財保護審議会 委員 石津 藤好